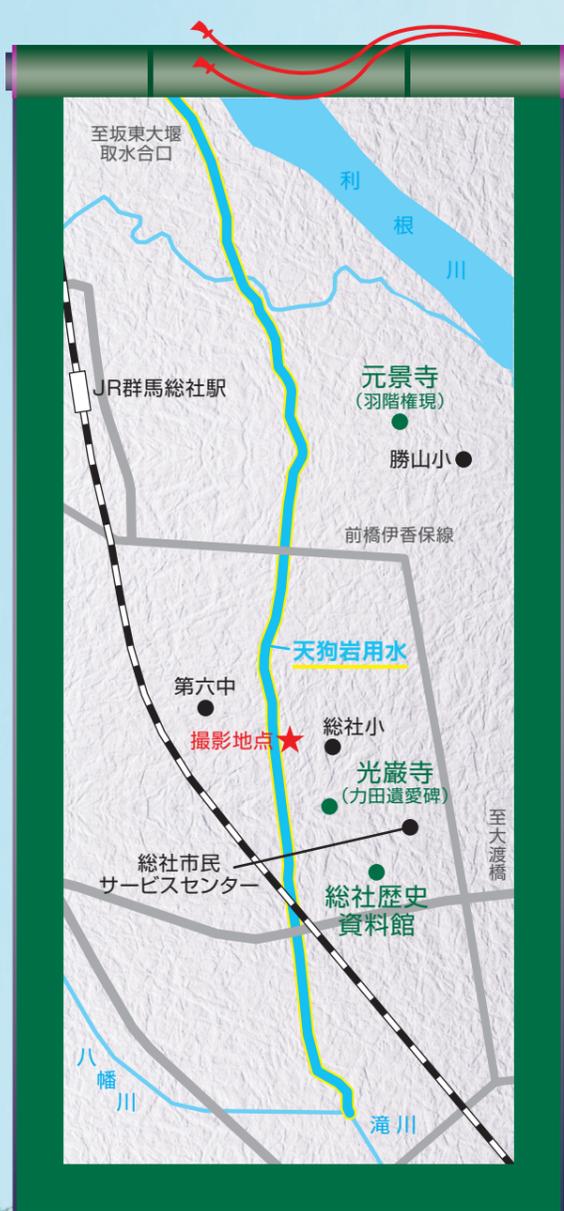


世界かんがい施設遺産に登録

# 天狗岩用水の歴史が評価

国文化国際課 ☎027・898・6992

国際かんがい排水委員会（ICID）は昨年12月8日、天狗岩用水を世界かんがい施設遺産として登録することを発表しました。天狗岩用水は、総社藩主秋元長朝公による開削から400年以上にわたって市内の農地を潤しているかんがい施設。八幡川と合流して滝川となり、市内だけでなく流域一帯にその恵みを与え続けています。世界かんがい施設遺産への登録は、県内では甘楽町の雄川堰、高崎市の長野堰に続く3例目です。



## ●長い歴史の出発点を探る

世界かんがい施設遺産となった天狗岩用水。その誕生には藩主と領民の深い関係や、農民が総動員して工事を成し遂げた物語があります。今も語り継がれる歴史の始まりを振り返ります。

総社歴史資料館（☎027・212・2558）では天狗岩用水に関する常設展を実施。ARで工事の様子や解説を見ることができます。詳しくは前橋フィールドミュージアムをご覧ください。



ところ、見事、岩が割れました。お礼を言おうとすると、すでに山伏の姿はありませんでした。人々はこの山伏を「天狗の生まれ変わりだ」と語り合うように。この話が、天狗が現れて大岩を取り除いたと言われている「天狗来助」の伝説とされ、その後取り除いた岩が天狗岩、用水が天狗岩用水と呼ばれるようになりました。当時の人々は、この天狗岩の上に祠を建てて天狗様としてまつりましたが、現在は元景寺の境内で「羽階権現」としてまつられています。

## エピソード ③ 天狗岩用水の完成

天狗岩用水は3年がかりで慶長9年（1604年）に完成。この用水のおかげで水田が広がり、総社藩は6千石から1万石の豊かな土地になりました。総社藩の領民は恩人・長朝に感謝を込めて、慶長9年から172年後の安永5年（1776年）、秋元氏の菩提寺である光厳寺に「力田遺愛碑」を建てました。力田遺愛碑を建てるにあたって、農家1軒1握りの米を出し合ったと伝えられています。領民が藩主・長朝をどんなに慕っていたかを示すものと言えます。封建時代に領民が藩主の業績を称えた碑は全国でも珍しい例。碑文の最後には、領民たちが碑を建てたことがはっきりと書かれていて、藩主と領民の温かい関係が時を超えて今も残されています。

出典・参考文献  
「天狗岩堰用水史」天狗岩堰土地改良区  
「前橋の文化財」市教育委員会  
「開削四百周年記念 天狗岩堰のあゆみ」天狗岩堰土地改良区



①力田遺愛碑（光厳寺） ②秋元氏を称え2年に1度開催される総社秋元公歴史まつり ③羽階権現（元景寺）

## エピソード ① 荒れた領地を潤す用水を

慶長6年（1601年）、関ヶ原の戦いの翌年に総社藩主となった秋元長朝。度重なる戦いや水不足で荒れ果てた領地は、かんがい用の水があれば豊かな土地になると考え、用水を造ることを計画しました。総社藩の東端を流れる利根川から取水しようとしたが、川の水位より高い土地のため、上流にある白井藩領（現在の吉岡町漆原）に取水口を造る必要がありました。そこで、白井藩主・本多氏の許しを得るため、高崎藩主の井伊氏に仲立ちを頼み、本多氏と何度も協議。その結果、白井藩に取水口を造ることが許されました。長朝は領民に協力してもらうため、3年間年貢を取り立てないこととし、慶長7年（1602年）の春、用水工事に取り掛かりました。

## エピソード ② 天狗来助によって難関を突破

工事は、最初は順調でしたが、取水口の近くでは岩が多くなり中断することも。最後には大きな岩が立ち上がり、行き詰まってしまいました。長朝や領民たちは困り果てるばかり。長朝は領内の総社神社にこもって願を掛けました。その願明けの日、工事現場に突然1人の山伏が現れ、「薪になる木と大量の水を用意して、岩の周りに火を付けなさい。火が消えたら岩が熱いうちに水をかけなさい。そうすれば岩が割れるでしょう」と言いました。人々は教えられたとおりにした